

二〇一四年度

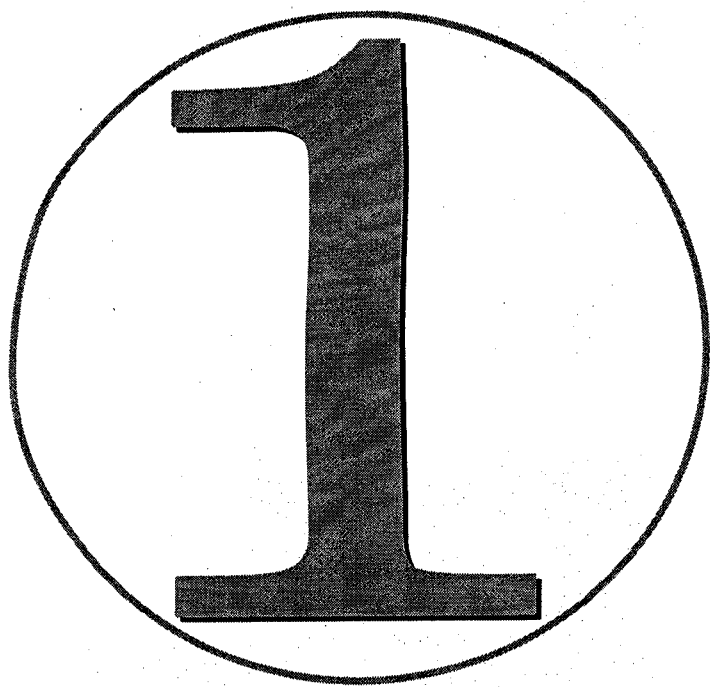
第一回入学試験問題

国語

時間 60 分

「注意」

- 1、放送で指示があるまで、この冊子さつしを開いてはいけません。
- 2、この冊子は22ページまであります。ページが足りなかったり、順序がおかしかったり、また印刷が不鮮明ふせんめいで読めない部分があったりした場合には、手をあげて監督かんとくの先生に申し出なさい。
- 3、問題についての質問は一切受け付けません。
- 4、下書きにはこの冊子の下書き欄らんや余白を使いなさい。
- 5、字数指定のある問題では、句読点やカッコなども字数に含みます。



一、次の①～⑤の文の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① 大会は炎^{えん}天下^{てんか}で行われるので、水分^{すいぶん}ホキ^ホユウ^{ユウ}に注意しよう。
- ② 大会の終^{しゅう}了^{りょう}した今日こそ、チームが次の大会へ向けてシド^{シド}ウ^ウする日だ。
- ③ 今年の新入部員は試合で活^{かつ}躍^{やく}できそうな人材のホウ^{ホウ}コ^コだ。
- ④ 大会に向けて練習を重ねるにつれ、選手たちのシ^シキ^キは高まっていった。
- ⑤ このメンバーなら、ここ一番という試合でもその力を十分にハッ^{ハッ}キ^キできるだろう。

(1-1)

二、例にならって、次の①～⑤の文のどちらの□にもあてはまる繰り返しの言葉を、それぞれひらがな四字で答えなさい。

例

・自然豊かな土地で□と育つ。

・久しぶりの休日なので□としている。

〈答〉のびのび

- ① 良い仕事に巡^{めぐ}り合^あって、人が変わったように□としている。
・魚が今にも動き出すかのように□と描^かかれている。
- ② 雪は激しくなり、銅像は□うちに白く覆^おわれてしまった。
・ベテランの大工の手にかかると、□家はできあがっていった。
- ③ 優^{やさ}しかった祖母の姿が□と浮^うかぶ。
・はげましてはみたものの、表情には落胆^{らくたん}の色が□と見えた。
- ④ 兄^{あな}が涙^{なみだ}を見せるなんて、□のことがあったのだろう。
・旅行の前日にけがをするなんて、□運が悪い。
- ⑤ 宿に着いて□、家に忘れ物をしたことを思い出した。
・居心地^{いこち}が悪くて□にその場を立ち去った。

(1-2)

三、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

大学生の大石和磨は、東日本大震災で被害を受けた東北地方でボランティア活動に従事するため、山浦という町にやってきた。軽い気持ちで参加した和磨だったが、そこで、妻を震災で亡くした田中という頑固な老人の家の整理を手伝うことになる。和磨が見つけた、画用紙に書かれた古い絵を見せると、田中は「知らない」とつぶねたが、和磨は仲間の成子と一緒に、その絵が、田中と亡き妻の過去にかかわるものであるらしいことをつきとめた。

田中のじいさんは木陰であくびをしている。A てつきり成子が田中に真相を伝えるのかと思ったら、あなたに任せるわと言って作業へ戻ってしまった。

成子のほうが、会話が成立しやすいのは明らかだ。それなのに、どうして和磨に委ねたのだろう。田中に文句を言われるのはしゃくだが、驚く顔も見なかった。推理を伝えれば、絵などいらないと言いつつ田中の表情は一変するはずだ。

貴重品置き場にあるクッキーの缶を持って、和磨は田中の元に向かう。

「ちよつといいつすか」

田中は眠そうな目で和磨を見上げた。

「なんだ」

① さつきの絵をもう一回見てもらうていいつすか

「知らねえと、ずうつと言ってるべ」

B ぜんざいな田中を無視して缶を地面に置く。汚さないようにしながら、先ほどよりも気を遣って絵を取り出した。

「この絵の画用紙には泥が染みえていますよね。でもよく見ると、汚れとは関係なく元から紙が黄ばんでいます」

「何の話をしてんだ」

「この紙が古いつてことつすよ。ところで、ちやぶ台の上に、四角くて白いものがありますよね。数字の5が入っていて、その隣に黒い線があります。これがこの絵の鍵だと思っんです」

先ほど成子から受けた説明を再現する。田中はおつくうそうにしながらも絵に視線を向けていた。四角い白に黒い線、そして数字の5。② 答えを知っている優越感からか、口調が回りくどくなる。

「それがどうした」

(1-3)

「これは多分、葉書だと思っんすよ」

白い長方形はちやぶ台の大半を占めている。だから実際のサイズと比較すれば、葉書より大きいだろう。だけど子どもの絵では、目に入つたものを大きく描くことは珍しくないで成子が言っていた。

「なんだと」

田中は眉間にしわを寄せて、絵に顔を近づける。ようやく興味を抱きはじめたようだ。推理の本番はこれからだった。

「葉書だという理由はいくつかあります。左上にある数字の5は多分切手です。そうなると数字の横にあるくねくねした線は文字つすよね。達筆な草書体なら、子どもには文字だとわからないはずです」

田中は絵から視線を動かさない。絵の描き手を、思い出しはじめているのかもしれない。

「五円切手で葉書を出せたのは、昭和二十六年から昭和四十一年の間だけ。つまり四十五年から六十年前のことなんです。赤い服を着ている小さいのは、女の子ですよ。これは幼なじみだった、田中さんの奥さんじゃないつすか」

切手が使われた正確な年代は、携帯電話を使って和磨が検索した。結論を言おうと息を吸い込んだところで、先に田中が口を開いた。

「この下手な絵を描いたんは、おらだ」

成子の推理では、田中と奥さんのどちらが描いたかまでは特定できない。しかし成子は、奥さんが旦那の絵を大事に保管していたと考えていた。その推測も正解だったようだ。大きな人間は田中か奥さん、どちらかの家族なのだろう。

田中はひったくるように和磨の手から絵を奪う。黙ったまま、しばらく紙の上に視線を落とす。顔を上げた田中はまず、田んぼを見つめた。次に山沿いへと視線を向ける。おそらくその方向に家が建っていたのだろう。

「あいつはこんなもんを、後生大事に取っていたんか。おらに黙って押し入れの奥さ、しまっておいたんか」

③ 田中は絵の表面に、しわだらけの指を這わせる。

「こいつの後ろにある筆筒はな、右の側面にあいつの落書きが残ってたんだ」

田中の姿が急に小さくなったように感じられた。先ほどまでの頑固じいさんの面影はどこにもない。

「あいつのいねえ家に、未練はねえと思つてた」

奥さんを亡くして、すっかりしよげていたと鯉崎は言っていた。

(1-4)

和磨は大学の*カウンセリング心理学の授業で習ったことを思い出す。ふだんはまともに勉強をせず、覚えている内容もほとんどない。それでも田中のぼう然とした表情に、和磨の記憶は呼び起こされた。急な事故や病気で*配偶者を失った人が、*極端に無気力な状態に陥ることがある。*麻痺や回避と呼ばれる。未来の展望や趣味などあらゆることに興味を抱けなくなるのだ。

専門家ではない和磨には断言はできない。しかし家にあつたものを不要だと言いつ放つたのは、震災による心の傷が原因なのではないかと考えた。

「全部、流されたんだなあ」

田中の目の端に、小さな涙の滴が浮かぶ。はじめて山浦を訪れたとき、和磨は自分も涙を流したことを思い出した。そして④急に、そのことが恥ずかしく思えた。

本当に泣きたいのは被災者なのだ。彼らは何度も涙を流しながら、それでも歯を食いしばり戦っている。同情の涙に意味なんてない。それどころか底の浅い共感、被災者に対する冒とくだ。

「おい、若い。名前さ教えろ」

「はい、えっと、大石和磨です」

感謝されることを期待していた。ありがとうと言われて、いい気になる自分を想像していた。そのことを叱られるような気がして、おびえながら身を固くさせる。

しかし田中は柔らかな笑みを浮かべ、和磨に向けて深々と頭を下げた。

「大石くん、ほんにありがとうな」

感謝される資格はないと、和磨は喉まで出そうになる。田中がどれだけ辛い思いしているのかを想像しようとしなかった。被災者と向き合う上で最も大切で、最低限必要なことを疎かにしていたのだ。

情けない気持ちでいっぱいになるけど、和磨は何も言えない。すべてが言い訳になるように思えて、黙っていることしかできない。その時、⑤ふと鯉崎の言葉を思い出した。

ボランティアの時間が終わり、和磨は全員の健康状態を確認する。怪我人はおらず、*遠藤の体調も問題なかった。バスは一旦対策本部に止まり、最後の挨拶をすることになった。

災害ボランティアセンター経由で作業を依頼される場合は、帰りにもセンターに寄って終了報告をする必要がある。しかし和磨たち一行は、直接地元へ戻ることになっていた。

参加者全員が並ぶ前に、鯉崎がよく響く声で言った。

「みなさんのご協力は忘れません。復興した暁には、ぜひ山浦へ遊びに来てください」

(1-5)

和磨は自分にできる精一杯の大声を出した。

「こちらこそ、お忙しいなかボランティアを受け入れてくださって、本当にありがとうございます。ありがとうございました」

それでも鯉崎よりもずっと小さく弱い声しか出なかった。参加者たちによる拍手がわき上がる。和磨は手を叩きながらも、複雑な思いを抱いていた。

出発直前のトイレ休憩を使って、和磨は鯉崎に話しかける。作業が終わった解放感からか、参加者たちは親しげに会話を交わしていた。

「あの、鯉崎さん……」

「なんだい」

鯉崎は穏やかな表情のまま、和磨の瞳をまっすぐ見つめてくる。和磨は目をそらさないように我慢してから、めいっばい頭を下げた。

「安易な気持ちで災害ボランティアを企画したことを、謝らせてください」

鯉崎は目を細めて、首を横に振る。

「私こそ、⑥はじめて会ったときに失礼な態度を取ったね。あのときはすまなかった。君の言葉が、柄にもなく引つかかってしまったんだ」

—今のような心づもりなら、無理に来ないほうがお互いのためかもしれないな

*先遣隊として訪れたときに受けた鯉崎の言葉は、ずっと和磨の心にあった。自分が何を言ったのか、和磨は必死に思い返す。

記憶がよみがえった瞬間、和磨は血の気が失せる思いがした。

—何でも言うてください。どんなに大変でも、全部やってあげますから

和磨は鯉崎に向けて、なんて傲慢で、失礼なことを言ったのだろう。ボランティアと被災者は対等であるべきだ。こちらが勝手に押しかけるのだから、邪魔になつていないか細心の注意を払う必要がある。

何かをやつてあげる、なんて上から与えるような態度は絶対に取つてはいけなかった。

軽率な発言に、今さらながら後悔でいっぱいになる。すると鯉崎は小さく息をついた。

「ボランティアにも色々な人がいるんだ」

和磨が首をかしげると、鯉崎は淡々とした口調で続けた。

「許可も取らず無神経に写真を撮る人もいた。家が無残に崩れた光景なんて、残されたくないのにな。」

(1-6)

作業中に手を抜きながら、へらへら笑ってばかりの連中もいたよ。彼らは大学の単位のために参加して
いたらしい。叱り飛ばしたかったが、ぐっと我慢したよ」

まるで自分が叱られているような気持ちになる。和磨も最初は就活という自分の利益のために、
災害ボランティアの企画を立てた。⑦ そいつらと同じだったのだ。

「被災者に感情移入をして入れ込みすぎる人もいた。そういう人は、被災者にもできる仕事まで奪って
しまうんだ。でもそれは決して地元住民のためにはならない。自立を阻むことになるからね。私たちは
これから、この土地で生活していくのだから」

手助けをしたいという気持ちだけでは、相手のためになるとは限らない。同じ行為でも、状況や条
件によって意味は変わる。何が必要になるのかをしっかりと考え、臨機応変に判断しなければ多くの人が
不幸になる。和磨は自分の考えの浅さを思い知らされた。

「申し訳ありません。俺たちは、ここで……」

返す言葉が見つからず、和磨は強く唇を噛みしめる。そのとき、鯉崎が和磨に向かって手を差し出
してきた。土汚れと傷にまみれた無骨な手だった。

「謝る必要はない。君たちは、私たちが望んだことをきちんとやってくれた。色々言っただけ、ボラ
ンティアは絶対的に足りていないんだ。来てくれて本当に助かったよ」

「でも俺、間違っていました。自己満足のために来ただけで……」

ためらいがちに鯉崎の手を握る。すると⑧ 痛いぐらいの力をこめられた。

「それでも、いいんじゃないかな」

意味がわからず、和磨は鯉崎の顔を見つめる。

「節度を守れば単位のためだろうが自分探さだろうが、どんな動機だって構わないさ。私たちは助けて
もらって、君たちは満足した気持ちを得る。本来は、それでいいんだよ」

「だけど、俺は本当に役に立てたでしょうか」

鯉崎は手を離してから、急に意地悪そうな笑みを浮かべる。温和な表情が多かったから、こんな顔も
するのかと意外に思った。大石の耳に口を近づけて、声をひそめて言った。

「本当は黙っているように言われたのだけど、あのペットボトルは田中さんが用意したんだ。市街地の
スーパ―まで、わざわざ車を走らせたんだよ。子どもたちを仕込んだのも、あの頑固じじいなんだ」

「まじっすか」

あの無愛想なじいさんが差し入れを用意して、子どもたちを集めたのか。その姿が、とても想像でき

(1-7)

なかった。

「あの性格だから表に出さないだろうけど、田中さんも喜んでいたんだよ」

田中が涙を流したことを話したら、鯉崎もきつと驚くだろう。もちろん軽々しく吹聴することは
しない。

「それともうひとつ、大石くんたちにお問い合わせがあるんだ」

鯉崎はきびすを返し、災害対策本部に入っていく。出てきたときには、両手でつかめるだけのマジッ
クペンを持っていた。

「本部の壁に名前を残していつてくれないかな。君たちがここに来た証として」

「いいんすか」

「こちらからも頼むよ」

「ありがとうございます！」

和磨はボランティアの参加者たちに向けて、本部の近くに来るよう呼びかける。ペンを配っていくけ
れど、なぜか誰も書きはじめようとしなない。和磨が不思議に思っていると、成子の旦那が不機嫌そうに
言った。

「まずはあんたが書かないと、みんな手を出しにくいだろう」

なぜか汗だくで、息を切らせていた。隣では成子も呼吸を整えている。まるでふたりして全力疾走を
した後みたいだった。

全員の注目が和磨に集まる。ペンを全て渡したため、和磨は手に何も持っていないかった。放り投げら
れたペンをキャッチすると、鯉崎が小さくうなずいた。

今回の災害ボランティアは失敗ばかりだった。多くの人たちの協力があって、たまたま成功しただけ
だ。本当ならもう二度と来ないと考えても不思議ではない。

それなのに、胸にわき上がる衝動は何なのだろう。和磨はペンのキャップを外し、壁のスペースを
じっと見つめる。ボランティアを続ければ、この気持ちの正体はわかるだろうか。⑨ 和磨は力強い筆跡
で、山浦の地に名前を刻みつけた。

(友井羊『ボランティアバスで行こう!』による)

※問題作成上の都合から一部原文の表記を改めた。

(1-8)

(注)

- *1 ちゃぶ台……食事などに使う小さな丸いテーブル。
- *2 草書体……漢字を早く書けるように崩した字体。
- *3 カウンセリング心理学……人の相談相手になる上で役立つ、心の動きに関する学問。
- *4 配偶者……結婚した相手。
- *5 遠藤……ボランティア活動のメンバーで、体調を崩していた。
- *6 先遣隊……先に現地について準備をする人たち。
- *7 就活……自分が望む仕事に就くための様々な活動。
- *8 子どもたちを仕込んだ……ボランティアのメンバーが山浦に着いたときに、子どもたちが歓迎してくれたことを指す。

(1-9)

問一

~~~~線部A「てつきり」、B「ぞんざい」、C「吹聴」について、これらの言葉を本文中と同じ意味で使っている文として最もふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

A「てつきり」

ア 彼は来ないと思っていたが、てつきり一番よい席に座っていた。  
 イ 出された宿題はてつきり自分でやるべきだと思う。  
 ウ できないことを頼まれたら、てつきり断ることが大事だと思う。  
 エ 父のめがねだと思っていたら、てつきりそうだった。  
 オ 仕上げててつきり委員長がやってくれるものと思い込んでいた。

B「ぞんざい」

ア 話しかけてみたが、ぞんざいにも無視された。  
 イ 自分は必ず勝つと、ぞんざいに思い込んでいた。  
 ウ 彼のぞんざいな態度に、友達はどうとう腹を立てた。  
 エ 勝つと思っていた試合は、ぞんざいな結果に終わった。  
 オ ぞんざいな日々を過ごしていくうちに、すっかり体力が落ちてしまった。

C「吹聴」

ア 彼はいつもクラシック音楽を吹聴している。  
 イ 今日の授業で学んだことを家族に吹聴している。  
 ウ 先生のお話をありがたく吹聴させていただく。  
 エ 友人の言葉に吹聴されて、ついCDを買ってしまった。  
 オ 音楽コンクールで入賞したことを近所の人に吹聴した。

(1-10)

問二——線部①に「さっきの絵をもう一回見てもらっていいですか」とありますが、このときの和磨の心情について説明した文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 絵の謎解きを伝えるには田中と仲のよい成子の方が適していると思っていたのに、自分に話をするように言ってきたので、驚いている。

イ 心を閉ざして絵を見ようとしてもしない田中に、自分たちが気づいた真実をどのように伝えたらよいか分からず、気が引けている。

ウ 震災で妻を失った田中に、田中夫婦の子供時代の絵を見せることによって、もう一度生きる希望を持つてほしいと思っている。

エ 頑固な田中に、絵が田中と妻の子供時代に関係の深いものだというのをわからせ、びっくりさせたいと思っている。

オ 自分の話に耳を傾けない頑固な田中に、いい加減自分の言うことを聞いて絵を調べてもらいたいと、憤りを感じている。

問三——線部②に「答えを知っている優越感からか、口調が回りくどくなる」とありますが、「答えを知っている優越感から」「口調が回りくどくなる」とは、どういうことですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 頑固で物わりの悪い田中に説明しなければならぬので、慎重に言葉を選んでいくということ。

イ 自分たちが真相を突き止めたことがうれしくて、真実を小出しにして田中をじらしているといううこと。

ウ 簡単には答えを言わないことで、そのうち田中也教えてくれと頼んでくるだろうと思いがつているということ。

エ やつこの思いで調べ上げたことを、きちんと田中に理解してもらうために、丁寧な言葉で説明してあげようとしているということ。

オ 絵について分かったことをゆつくりと話していけば、田中もいつかは話ののってくるだろうと、たかをくくっているということ。

(1-11)

問四——線部③に「田中は絵の表面に、しわだらけの指を這わせる」とありますが、このときの田中の心情について説明した文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 幼い時、まだ自分の妻になるとは知らない女の子の絵を無邪気に描いていたころの自分の姿を、懐かしみながらたどろうとしている。

イ 今は亡き妻が、自分との思い出を大切にしていたことがわかる物にじかに触れることによって、妻との暮らしをしみじみと思い出している。

ウ 二人にとって大事な思い出になるはずの絵を、妻がどうして押し入れの奥に隠していたのか分からず、とまどっている。

エ 震災後の風景は、絵に描かれていた風景とは一変してしまっており、妻との思い出が失われてしまったことに落胆している。

オ 亡き妻が描かれている絵をなぞっているうちに、波瀾万丈だった自分の人生を思い出し、ようやく訪れた平穏さをじつくりと味わっている。

問五——線部④に「急に、そのことが恥ずかしく思えた」とありますが、それはどうしてですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 未熟な自分にも温かいまなざしを向けてくれる田中の心の広さを知り、自分の小ささを認めざるを得なくなり、つい涙をこぼしてしまったから。

イ 妻を亡くした田中の深い悲しみに触れ、以前に周りの人たちが泣いているのにつられて思わず泣いてしまったことを後悔したから。

ウ 被災者に同情して涙を流すばかりで、実際には何の助けにもなっていない自分の無力さを痛感してしまったから。

エ 絵の真実を知った頑固な田中が不意に涙を浮かべたことで、今にも感謝されるのではないかと、思ってしまった、照れくさくなったから。

オ 深い悲しみをかかえて生きている被災者の流す涙を目の当たりにして、自分本位な同情の涙を軽々しく流していたことを思い知らされたから。

(1-12)



四、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

テレビは、現実の出来事から「画」と「音」と「時間」を切り取りそれを組み合わせて提示するメディアである。テレビ報道の取材は、いわば「使える映像」と「使えることば」を集める作業である。切り取り方とつなぎ方しだい出来事の本質を的確に伝えることもできるが、まかり間違えば事実を歪めることにもなりかねない。

まずは「画」。例えば水害の被災地。床上まで浸水した住宅、寸断した道路、崖崩れの現場が繰り返して映し出されると、その地域全体が壊滅的な被害を受けたような印象を受ける。ところが、被災箇所はごく一部、というケースがある。住宅や道路の被害や崖崩れは事実であり、死傷者が出ていることも事実であつても、それが全体状況とは限らない。

つぎに「音」というより「ことば」。国会の質疑でも、スポーツ選手のインタビューでも、通行人の目撃談でも、テレビは①インパクトのある部分だけを切り取って伝えることが多い。限られた時間で伝えるには、有効な音やことばを短く切り取る必要がある。しかし、それがすべてではない。

そして「時間」。テレビは、世の中の出来事から決定的な瞬間だけを切り取り、短くつなぎ合わせて放送する。三時間近い野球の試合も、ハイライトシーンだけを取り出して数十秒に縮めることができる。逆にわずか数秒のプレーを、スローモーションで再生したり、角度の違う映像を何度も繰り返してつないだりする。ときには時間をさかのぼらせたり、出来事の順序を変えたりすることもできる。

「画」や「音」や「時間」を自在に切り取り、効果的につなぎ合わせる作業は、ビデオ編集機器の高度化に負う所が大きい。ラジオ時代は、収録してきたテープを、はさみと接着テープで文字通り切り貼りしていた。テレビの初期も、フィルムを切っては手作業でつないでいた。ビデオ技術の発達で、テープを切らずに編集する「スプライスレス編集」のシステムが登場し、テレビ表現は画期的に変わった。さらには、デジタル技術の高度化で、記録媒体はテープからディスクに変わり、いまや家庭用ビデオでも、映像、音声、時間を手軽に入れ替えたり、組み替えたりすることができるようになった。

ビデオ編集の技術は、どんな出来事も、短時間で手際よく、コンパクトに編集することを可能にしたが、編集の仕方しだいでは「事実」が歪曲される危険性もはらんでいる。

取材現場では、カメラマンは②現場を端的に物語る「画」をさがす。リポーターは、取材相手からどれだけ短くインパクトのある「ことば」を聞き出せるかが勝負である。相手の話を聞きながら、放送で使えることばを選び分け、頭の中で瞬時につなぎ合わせる判断力、編集力が欠かせない。取材相手が

(1-15)

その場でしか発することができないことば、③その人ならではのキーワードを探り出そうとする。取材インタビューでは、根掘り葉掘り質問をしてもなかなかキーワードにたどりつけない場合が多い。それがほとんどであるが、逆にたくましくして名文句に出会えることもある。

人は感動的な瞬間には、率直で、思いもよらない名文句を口にする。オリンピックでメダルを獲得した瞬間のことばには、強力なインパクトとその人ならではの味わいがある。

水泳の北島康介選手は、アテネ五輪で金メダルのゴールを決めたとき、「チヨウ気持ちいい。鳥肌もです」と両こぶしをにぎりしめながら叫んだ。

バルセロナ五輪金メダルの岩崎恭子選手は「今まで生きてきた中で一番幸せ」と語り、まだ一四年しか生きていない少女のことばが、日本中を驚かした。

アトランタ五輪女子マラソンで銅メダルを獲得した有森裕子選手は、四位の選手に六秒差まで迫られたのゴールの後、「自分で自分をほめたい」と語った。

こうした名言はその部分だけを切り取って、何回も繰り返し放送される。ことばだけでなく、そのときの表情や現場の映像と相まって、人々の記憶に残る。いずれも数秒から十数秒である。テレビ局にとっては短い名文句は都合だが、本人にとっては、そのことばに至るまでにはかなりの曲折がある。

有森選手の「自分で自分をほめたい」の前段には、このことばに至る心境が語られている。当時のVTRを調べてみると、アナウンサーの質問にこう答えている。「メダルの色は、銅かもしれないけれども……、終わってから、なんでもっと頑張れなかったのかと思うレースはしたくなかったし、今回はそうは思っていないし……、初めて自分で自分をほめたいと思います」。心の整理を付けながら「自分をほめたい」にたどりついたことがよくわかる。

とかく人々の印象に残るひと言は、削りに削られた断片的なことばになりがちである。しかし、短いことばであればあるほど必ず④そこに至るまでの前提がある。切り取ったことばだけが独り歩きし始めると、真意を歪めたり誤解を生じることにもなりかねない。ビデオ編集では、明快さを追求する一方で、ひと言にたどりつく過程をどこまで生かすかという、持ち時間とのせめぎあいがつもついて回ることになる。

政治家の弁も短いほど分かりやすい。簡潔なことばは大衆にアピールしやすいが、その一方で短いことばだけを切り取ると、さまざまな波紋を生じることにもなる。

「ワンフレーズ」が評判となった小泉純一郎元首相は、端的なひと言をしばしば発した。大相撲の表彰式での「感動した！ おめでとう！」「新記録！ 大記録！ みごとだ！」は簡潔さが評判と

(1-16)

なった。一方、「自民党をぶっ潰す」「反対する勢力はすべて抵抗勢力だ」は、反対勢力の反発を招き、しばしばそのフレーズだけがテレビ、新聞に引用された。

二〇〇九年の政権交代後、\*1 行政刷新会議の事業仕分けでは、連舫議員の発言が繰り返しテレビに登場した。次世代スーパーコンピューター開発の予算削減をめぐる「世界一になる理由は何でしょうか？二位じゃダメなんですか？」のくだりである。

テレビでは、しばしば後半の「⑤二位じゃダメなんですか」の部分が引用され、これに対してノーベル賞受賞者から「世界一である必要はない」と言った人がある」との批判が出された。当の連舫氏は、後日「一位を目指すのは当然で、あえてそう聞くことにより納得のいく答弁が聞けるかと思っただが、残念ながら聞けなかった」という趣旨の発言をしている。

わずか\*2二センチンスでも、「世界一になる理由」を尋ねた前段と、「二位じゃダメなんですか」と疑問を投げかけた後段とでは、微妙にニュアンスが違ふということなのだろう。テレビにとつてはことは短いほど都合だが、どの部分を切り取るかによつて、伝わり方にも差が出てくることになる。

スポーツ選手や、政治家に限らず、取材現場では一般の市民に込みいった話を聞く機会が多い。相手が短いことばで端的に答えてくれればよいのだが⑥なかなかそうはいかないことの方が多い。

農村で利害の対立する問題について取材していた時のことである。取材相手の農家の主婦は、微妙な問題なので、前置きや言い訳をしながらことばを濁し、なかなか核心に触れることばを発してくれない。カメラとマイクを向けられている上、インタビュアーの私が「その時、どんなふうに感じましたか？」と改まった聞き方をするものだから、答える側も堅くなる。

あまりに答えが出てこないの、撮影をしていたカメラマンが業を煮やして、「おばちゃん！そんな時、どうしたのよ！」と叫んだ。すると、口の重かった主婦が方言交じりで熱っぽくしゃべりだしたのである。まさに聞き出したかったことを過不足なく話してくれる。結局、放送では、カメラマンのことばをカットして主婦の答えだけを使ったのだが、痛感したのは、改まったことばではなかなか本音は引き出せないということである。かといって、アナウンサーの私が「おばちゃん！」と言うわけにもいかない。こちらの声も\*3オンエアされることがあることを考えると質問のことばにも一定の配慮が必要である。

リポート取材では、その人でなければ話せない内容とことばを聞き出したい。そのため、話を引き出すきっかけを作ったら、こちらは口を挟まず、むやみに相づちを打たず、相手の眼を見ながら、じつと

(1-17)

ことばを待つことが肝心である。そして、短く取り出せるひと固まりのことばを発してもらえたらそれが一番である。間違っても誘導尋問はしないこと。こちらの声で「そのときは恐ろしかったでしょう？」、相手の答えが「はい」のひと言では、放送で使えるインタビュにはならない。

テレビは「映像」と「ことば」と「時間」を切り取ったり、つなぎ合わせたりして提示するメディアである。ビデオ編集でその作業はたやすくできる。それだけに、制作者の意図に沿った、都合のよい部分だけを取り出しがちである。

都合の悪い部分をカットしていけば破綻のない番組は作れるし、バラエティーやお笑い番組でも\*4NG部分をカットして面白おかしく編集することもできる。編集手法としてはバラエティーやドラマも、報道リポートやドキュメンタリーも⑦同じである。巧妙につないでいけば、フィクションをあたかも事実のように提示することもできる。

カメラに映った映像、マイクが拾ったことばは「事実」の一部ではある。しかし、それがすべてではない。どんな「画」と「音」を切り出すかは、取材者、制作者の見識にかかっている。情報の送り手は、⑧映像やことばの背景や周囲に気を配る謙虚さがつねに求められる。

同時にテレビの視聴者も、画面に提示された映像やことばは、編集を経て切り取ったりつながれたりしたものとして受け止める賢さが、つねに必要である。

(加藤昌男『テレビの日本語』による)

※問題作成上の都合から一部原文の表記を改めた。

(注) \*1 行政刷新会議の事業仕分け……政府が余分な出費を抑えるために、不要な事業をなくしたり縮小したりしようとする話し合いのこと。連舫議員はその中心人物の一人であった。

\*2 二センチンス……二つの文のこと。

\*3 オンエアされる……テレビやラジオなどで、実際に放送されること。

\*4 NG部分……撮影されたものの、番組作りの上で使えないと判断された部分。

(1-18)

問一——線部①に「インパクトのある部分だけを切り取って伝える」とありますが、それはどういうことですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 視聴者の心を動かす物語のようなものを選んで放送すること。
- イ 忘れたい印象を残す話し方を心がけて報道すること。
- ウ 視聴者に嫌悪感を与える映像は除外した上で放送すること。
- エ 番組の都合上、できる限り短いコメントを選んで報道すること。
- オ 視聴者の興味を引きつけるような場面に限って放送すること。

問二——線部②に「現場を端的に物語る『画』をさがす」とありますが、それはどういうことですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分が感じ取った第一印象を、正確に視聴者に伝えるような映像を見つけようとしているということ。
- イ 現場がどこであるのか、誰にでもすぐわかるような目印を、映像の中に入れるようにすること。
- ウ 取材先でコメントを聞き出すリポーターの話とうまくかみ合うような映像を選ぼうとしているということ。
- エ 映像を見ただけで何が起こったのかが簡単に、また正確にわかるようなものを撮ろうとしているということ。
- オ 現場の雰囲気（ふんいき）をすみやかに視聴者に伝えられるように、わかりやすい映像を編集しようとしていること。

(1-19)

問三——線部③に「その人ならではのキーワード」とありますが、それはどういうものですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア その人の性格や特徴（とくちょう）を端的に表す、印象的な言葉。
- イ その人だからこそ口にすることができた、心に残る言葉。
- ウ その人が人々に感動を与えようとつむぎ出した、味わい深い言葉。
- エ その人でないとわからない、深い意味が込められた言葉。
- オ その人の生き方に大きな影響（えいきやう）を与えた、忘れられない言葉。

問四——線部④に「そこに至るまでの前提がある」とありますが、それはどういうことですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人々に強い印象を残す言葉というものは、決定的な瞬間（しゅんかん）に自然と心の中にわき上がってくるということ。
- イ 深く響く言葉として視聴者の心に残るよう、余分な言葉や説明を省いて、分かりやすいものに仕上げていくということ。
- ウ 感動的な瞬間に人々が発するインパクトのある言葉の背景には、自分の見えない努力を認めてほしいという気持ちがあるということ。
- エ 人々の印象に残る端的な言葉の背景には、過去の失敗から反省して得られたものが積み重なっているということ。
- オ 印象に残る短い言葉は、それまでに積み上げてきたものや経験してきた思いがあって初めて生まれてくるということ。

(1-20)



氏名

番

聖光学院中学校

二〇一四年度

第一回 入学試験 解答用紙 国語

【注意】解答はすべてこの解答用紙に記入すること。

得点合計

一、

①

②

③

④

⑤

二、

①

②

③

④

⑤

三、

問一

A

B

C

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

15

40

20

四、

問一

問二

問三

問四

問五

A

B

問九

問十

問七

問八

問六

問七

問八

40

20

14 聖光①